

新収資料 丸岡明「三田派・早稲田派 ―文壇早慶戦―」

村田 聡史（資料管理課）

図書館はこの夏、『改造文芸』1巻4号（昭和25年10月）に掲載された丸岡明著「三田派・早稲田派―文壇早慶戦―」の原稿をあらたに収蔵した。「文学界社箋」の400字詰原稿用紙17枚にわたって著されたものである。本人による修正は、例えば黒インクの傍線が該当部分の上にしっかりと引かれている様子などを見ると、文筆家によくありがちな乱筆ではなく非常に読みやすい。編集者によると思われる朱もほとんどなく、わずかに表題、章題、氏名の文字ポイント指定のみという、大変見映えの良いものである。ただし、本資料を特徴付けている副題「文壇早慶戦」もまた朱書きである点は、注意していいだろう。

この文章はそもそも、丹羽文雄と石坂洋二郎、井上友一郎と北原武夫、北條誠と柴田錬三郎という組合せを造つて、その人物と作品について書いてくれとのことであつた。

とあることから、出版社からの依頼をきっかけに執筆された原稿のようだが、序章の題にもなっている「ひとつの提案」は、具体的には「三田派」「早稲田派」という概念区分を提案し、戦後文学の展開に照応しようとする試みを指しており、非常に印象的である。何と言ってもこの「早稲田派」という表現からも、本学に関係の深い資料と考えてよいだろう。

丸岡明（明治40～昭和43年）は、暁星中学校から慶應義塾予科を経て、慶應義塾大学仏文科を卒業した小説家である。在学中に水上瀧太郎の知遇を得て、処女作「マダム・マルタンの涙」を『三田文学』（昭和5年2月）に発表し、佐佐木茂索、阿部知二、横光利一から評価を受けた。その後は堀辰雄に師事し、長編小説「生きものの記録」を『三田文学』（昭和10年10～12月）に執筆し、同時代の人々を心理主義的手法で描く作家としてその地位を築いていった。そして何よりも、戦後『三田文学』の復刊にあたり、その発起人として、太

田咲太郎、片山修三、柴田錬三郎、原民喜らを編集に従える中心的存在であったことは看過できないだろう。しかし、丸岡は云う。

三田派、早稲田派と云ふ風に考へると、今は早稲田派の黄金時代であらうか。中山、丹羽、石川、田村、井上君など、体格もなかなかよいし、なにしろよく書く連中が揃っている。そこへゆくと、三田派は兎角孤立して、一人一人仕事をしてゆく傾向がある。どうもさうした気質の者が多さうだ。それでは氣勢があがらぬから、十五日会の向ふをゆくやうな会合をやり度いと鈴木重雄君達は云っている。

三田文学界の重鎮である丸岡から、まさかというべきか「早稲田派」を賛美する発言である。こうした主張の背景となつた当時の社会状況とはいかなるものであつたか。それを理解するために、『読書倶楽部』4巻11号（昭和25年12月）に発表された「文壇・睡眠不足の一年 1949年の印象風景」というエッセイに目を転じると、丸岡はこう述べている。

今年は後半期になつて、日配問題などもあり、真面目な純文学雑誌が次々と発行中止になつた。「知識人」「表現」「世界文化」など、その例である。「早稲田文学」も出ていないし、「個性」も十一月で休刊になるらしい。鎌倉文庫も、解散するような噂である。

日配問題とは、戦時中日本の出版流通を独占していた国策取次会社「日本出版配給」が、戦後GHQによる経済民主化の一環で閉鎖指定を受け、活動を停止せざるをえなかったことを意味している。その影響は数多くの出版社に深刻なダメージを与え、まさに純文学にとっては厳冬の時代を迎えていた。

悪の花ばかりが栄えているわけではないが、読者層の浮遊しているこの激動期に、落ち着いた文学をつくらうとすることが無く、既に困難なのだろう。

という言葉はその切実な様子を物語っている。事実『三田文学』は昭和25年6月までひとまずの命脈を保ち続けていたが、『早稲田文学』は昭和24年9月を最後に第四次の刊行を終えている。たしかに『早稲田文学』の方が先に力尽きた。しかし、それにもかかわらず、毎月70余名の作家、ジャーナリスト、文学青年達が、有楽町のピアホール「レバンテ」で集会していたという「早稲田派」の開催する「十五日会」の意気盛んなこと。丸岡の目には、逼迫した状況の中でも文筆活動の拠点となりうる自立的結社として映じたに違いない。「早稲田派の総帥のやうな印象を受ける」最近の丹羽文雄に賛辞をおくるのも頷けることである。

では、「三田派」「早稲田派」の根底を形作っていたものは何か。丸岡は、前者に佐藤春夫『近代日本文学の展望』（昭和25年7月、大日本雄弁会講談社、慶應義塾での全6回の連続講義をまとめたもの）の提唱する「浪漫的自然主義」を、後者に正宗白鳥『自然主義盛衰史』（六興出版部、昭和24年11月）の提唱する「新自然主義(?)」（原文ママ）を挙げている。それぞれを象徴する人物として、佐藤はのちのロマンティズムに連なる森鷗外に、

白鳥は自然主義の源流というべき坪内逍遙に言及しているから、明治20年代の「逍鷗論争」いわゆる「没理想論争」の延長線に位置すべき争点とも解釈できるだろう。また、当時主流であった文芸誌『近代文学』と『新日本文学』のあいだで繰り広げられた「政治と文学」論争を尻目に、新しい文芸思潮の構図を提案しようと意図している点も、深く研究されるべき対象となるに違いない。

そのほかにも、丸岡は「従来の作家や作品を否定しようとする気構へがあつて、それが問題を取り上げる場合の角度の相違になつている」いわゆる戦後派と呼ばれる作家を評価する。椎名麟三、梅崎春生、三島由紀夫、武田泰淳、埴谷雄高、野間宏などが代表的人物である。『早稲田文学』や『三田文学』の諸氏を評価する場合でも、そうした新しい問題提起を目指そうとする姿勢が重要な基準となっているのだろう。

ふりかえれば、明治24年10月、坪内逍遙によって発行された『早稲田文学』はその後も、第二次の島村抱月、第三次の谷崎精二、と大家というべき人物が編集者の座にあつたため、戦後の第四次以降の展開はどうしても陰に隠れがちであった。しかし、丸岡の論考はそうした部分に一閃の光を差し込むような面白さをもっている。この資料がさらに取り上げられるようになることを期待したい。